源　影　面　（上）

吉　野　忠
（教育学部国語研究室）

On Minamoto-no-Kagetomo (1)

by
Yosino Tadasi

序

源影面は，「采藻編」の編者，「古今集和歌助辞分類」の著者として，近世和歌史・国語学史に，ささやかながら足跡を残している歌人・和学者である。

影面は，賀茂真渕の門人であったこともあり，その間に，かれの意見も真渕に何らかの刺戟を与えたようである。

しかし，影面について，詳細なことはわかっていない。和歌文学大辞典に，影面に1項目を設けたのにかかわらず，その見出しを「景面（かげ）」と誤っているのもそのためであろう。国会図書館の著者名カードにも，「Murakami, Kagemo」となっている。

影面について比較的詳しく書いたものには，次のものがある。

(1)　武藤致和・平道編　南路志　人物（巻45）・年譜（巻77）　文化年代

(2)　福島鷗波　宝暦の偉人（土佐史談　第24号，昭和3年）

(3)　松山秀美　土佐歌人群像(二)　内藤中心（土佐史談　第31号，昭和5年）

(4)　寺石正路　土佐偉人伝（大正3年初版，昭和15年改訂）

しかし，(2)(3)(4)には，それぞれ修正すべき点がある。

影面の著作については，次の書に解説がある。

「采藻編」については，「大日本歌書総覧」（福井久蔵）

「古今集和歌助辞分類」については，同書および「国書解題」（佐村八郎）・「国語学書目解題」（赤堀又次郎）・「国語学史」（山田孝雄）など，

「紫語素註」については「国書解題」。

わたくしは，ここ数年，影面に関することに注意してきたのであるが，なお断片的なことしかわからない。けれども，今わかっていることをまとめて，今後の増訂を期したいと思うのである。

1　名　ま　え

従来，影面でない人が影面と同一人と誤認せられていることもあるので，名まえを確認しておきたいと思う。

源影面（かげとも）は，本名を村上弁蔵[1]といい，村上名道[2]・村上織部[3]と称し，村上随蔭[5]・村上随影[4]・源影面[6]・雪斎[7]と号した。大忍兵士（おほさと）[8]とも号したことがあるという。

海名[9]も源影面ではあるまいかと思われる。

源敏樹[10]・村上忠次祐之[11]・伊藤中心[12]・内藤中心[13]を源影面の別名とする説があるが，そ

れらは別人である。

(1) **村上弁蔵**　「南路志」人物の部に村上影面の「字」とし，年譜に「村上織部」の「前名」としている。本居大平編「八十浦の玉」上巻に「村上影面」の歌を出して，あとに，

右三首影面は土佐高知村上弁蔵といふ。

とある。

(2) **村上名道**　「南路志」に「初名」（人物），「初字」（年譜）としている。「南路志」巻84所収「村上名道（後改影面）母七十賀歌」――これは武藤家の「敏屋（みのや）蔵書目録表」（刊本「南路志　闕国之部」上巻口絵）に「村上名道母七十賀歌」とあるのをそのまま収めたものと思われる――に，

ふるさとなるはゝの七十になれるをいはふとて人々にこひてよませはへりける時

あるし　源　名道

たらちねをかけてそいはふ大里の千世の小松の神のまにまに

とあるのが，「続采藻編」賀歌に，

春はかりとさの国なる母の七十賀し侍けるにかしこの地の名によせて歌よみて賜りけるついてによみ侍る　影　面

たらちねをかけてそ賀ふおほさとのち世の小松の神のまにまに

とあるのによって確認せられる。（もう1首12月の歌も，名道――影面である）「名道」は，賀茂真渕関係の文献にも見え，真渕門にあったころの雅名と思われる。

(3) **村上織部**　「続采藻編　作者」の終りに，

采藻編集者村上織部

源影面

とある。「南路志」の記述では，土佐藩を脱藩し，一乗院宮に仕えたころ改名したものであるという。

(4) **村上随影**　賀茂真渕の明和6年蓬莱雅楽あて書簡に，随影は谷丹四郎（垣守）の頼みで，数年書会などへも連らせたとある。垣守自筆の「古事記聞書」に，

右古事記上巻会読某在府帰郷往来闕坐不全備今以村上随影校合本并聞書補写且本書改点了

寛延三年庚午七月廿六日　谷　垣守

とあった由（南信一氏「賀茂真渕の古典会読」国語と国文学　昭和21年9月号31ぺ）である。また，垣守日記に，古典会読の出席者を列記した最後に「村上弁蔵」と自分とをしるしていた由（同30ぺ）である。「古事記聞書」「垣守日記」は今日所在不明であって，検することができないが，上の事実から，村上随影が村上弁蔵であることはまちがいあるまい。随影も真渕門にあったころの号であるらしい。真渕の万葉集書入れにも随影の名が見える。

(5) **村上随蔭**　高知県立図書館山内文庫「臣子弟のわきまへ・五欲のわきまへ」（谷垣守著）は，村上随蔭が元文5年12月江戸の垣守の部屋で写したという奥書を有する。「随蔭」の名は「随影」によく似ており，村上弁蔵が垣守の近くにいたことは，延享元年6月岡田盤斎の病をとうために弁蔵を遣したこと，真渕会読へ垣守とともに列したことからもわかるのであるから，随蔭は随影の前号であると思う。随蔭・随影というのは，垣守のカゲにしたがうという意味でつけたのではあるまいかと思われる。

(6) **源影面**　「影面」は，日本書紀成務天皇の段の「山陽曰影面，山陰曰背面」とある文字をとったもので，万葉集に影友とあるようにカゲトモとよむ。采藻編初編に，

卯月はかりみなもとのかけともか川辺のやとにうつろひけるほとにまかりて

とあり，続采藻編に「影とも」とある。

影面の名は随影，すなわち，カゲニシタガフ→カゲトトモニの連想と，出身地土佐が四国山脈の南面にあることから選んだものではあるまいか。影面の名は，采藻編・古今和歌集もとのこころ・紫語素注・古今集和歌助辞分類・藩への上書などに見えている。

(7) **雪斎**　「古今集和歌助辞分類」は，序には「源影面師。古今和歌集のもとのこゝろを著はしけるに。かの集に出たるてにをはの分類。上下二まきを著せりける。」とあるが，見返しに「雪斎大人著」とあり，また，奥付に

右書斎蔵版　齋面　影面之印

とある本（明和六己丑初冬植村・西村・近江屋版）もある。

(8) **大忍兵士**　「南路志」によると，土佐藩脱藩後にこの名を称したようである。江戸在住時代らしい。大忍は故郷の郷名である。上に引用した母七十賀の歌にも出ている。現在の香美郡香我美町およびその近隣の地である。兵士と称したのは，武の道にすぐれていたせいであろうか。

(9) **海名**　賀茂真渕の延喜式祝詞解（延享3年）大祓の解に，

　塩ノ八百道云云ハワカ門人土佐人海名カ云ク潮汐ニ多ノ入江ノクマクマオチス来去シテ止ル事ナケレハ云ナルヘシト（山内文庫本による）

とある。山内文庫本は垣守が入手した本かと推測されるものである（拙稿「荷田在満の『祝詞式和解』について」――高知大学学術研究報告第14巻人文第12号）。増補賀茂真渕全集本は「浄名」になっているが，「海名」は「賀茂の川水」にも2回出ているから，「海名」が正しいはずである。「賀茂の川水」の1つは，「未正月当座」で宝暦元年正月の作，

　かくばかり都の人のたれかみし月かげ須磨の浦伝して

1つは「当座」で年月不明，

　声立ん秋もちかきをますらをか岡へのともしさゝてあらなん

である。前者の同座者に「佐芳」（千蔭の幼名）がおり，後者の同座者には「千蔭」がいるから，後者は前者より後である。これらの同座者には，橘常樹や名道はいないようである。延享3年当時真渕門に出入した土佐人には，垣守・真潮・常樹・影面がある。宝暦元年正月には真潮は江戸にいない。真渕が「ワガ門人」というのは，たいてい年齢も真渕よりだいぶん下の人であるようである。垣守は1年下，常樹は7年下であるが，かれらについては「わが門人」とは言っていない（祝詞解・冠辞考など）。影面は真渕より20年ぐらい年下であるから，海名は影面ではないかと思われる。名道の書いたものに「碧海筆記」のあることも，海名が名道ではないかを想像させる。さらに，その想像をうらづけるような事実がある。「祝詞解」の，橘枝直所持本系統と思われる国会図書館本（そ5，12）・内閣文庫本（143，200）には，かの「土佐人海名」の「海名」の部分が空白になっている。これは，生涯の「真渕との関係(2)」で述べる万葉集書入れにおける随影抹消と同じく真渕が白墨で「海名」を塗り消し，枝直がそのまま空白に写したものではないかを想像させる。ただ，しかとした証拠がないので，海名を影面と断定することにはやや躊躇せられる。

(10) **源敏樹**　松山秀美氏は，賀茂翁家集巻2の「源の敏樹が母の七十の齢を芝といふ所の海のつらの家にてことほぎすめるに歌よめとあれば――わたつみの常世の波をよるべにていはふよはひは数もしられず」ならびに巻4の「源敏樹が母の七十をいはふ詞」を名道の母の七十の賀の時のものとしている。しかし，①名道の母の七十賀に真渕のよんだ歌は，「南路の常世の浪をよるべにてはるかに祝ふことのよろしさ」であって，この歌とは第2・3句だけが共通である。②「賀茂翁遺草」の「源の辻の敏樹ぬし母とじの七十いはひのことば」によれば，敏樹の母は「みづからわかなをつみ小松を引つゝ」とあって，敏樹と同居していると思われる。③影面は真渕から除名されたのであるから，真渕門人の編んだ家集に影面関係のものを入れるとは思われない。それで，源敏樹は名道ではないと思う。「土佐偉人伝」に「繁樹」とあるのは「敏樹」の誤植であろう。

(11) **村上忠次祐之**　福島鷗波氏は，宝暦9年10月15日・同11年正月元日・同11年9月3日・同13年7月26日の藩への上書の署名，源影面・村上織部・後免町に罷在る浪人村上忠次祐之・後免町にて子供指南仕る者村上忠次を同一人と認められた。そして，9月3日の上書の末尾として2節を引用していられるが，その2節に述べる上書者の経歴は全くちがうのであるから，少なくとも同一文書ではなく，一方の日付けを誤記されたものであろう。その一方（おそらく宝暦11年正月元日付け）の上書者は，九条・冷泉の公卿や江戸の諸侯の家に出入している知名の士であり，他は後免町で20年小童の指南をしている無名の人である。前者は，影面の経歴に，わかっている限りでは一致する。上書の内容も，前2回のは，「貢物取立改良・土木普請取扱不良・百姓苦役」・「産物の奨励・富国安民」のことであり，後2回のは，侯臣登庸・権門にへつらう小民が志を得ていること・武士が常識なく算術を知らぬことである由で，前後異なっていると思われる。（現物は戦災で失われたらしい）。それで，わたくしは，前2回のは影面のであり，後2回のは村上忠次祐之のであり，

影面と祐之とは別人であると思う。「南路志」年譜の「村上織部」伝には，「せうそこ一章」が引用せられているが，それは「名道」から「祐之」にあてたものである。文面から見て，実際の手紙かどうか疑わしくもある。文範だとすれば，自分の別名を他人めかしてつかうこともありえるのであるが，やはり別人で，友人ないし親族ではあるまいかと思われる。祐之は「見憎草」（宝暦12年正月15日成る。2月序。土佐国群書類従所収）という著述があり，その本文の終りに「土佐国長岡郡後免町　村上源祐之」序に「土佐国長岡貢免庵　村上忠祐之」としるしている。その書の内容は，金銭は人のつかうものだが，かえって金銭につかわれるのは，欲という狐につかわれるのである，今富貴であるのは祖先積善の余恵である，常に仁を施し，義を立て，礼を重んじ，誠を本として，神仏を敬い，倹約をまもれば，神仏のご加護を得るであろうということであって，上の後2回の上書の内容と似たところがあるようである。

(12)　**伊藤中心**

(13)　**内藤中心**　いずれも，松山氏が影面の別名とせられたものである。内藤中心は，年齢が約25歳ちがう点だけからも別人と考えられる。松山氏は，伊藤中心は内藤中心の誤記とするのであるが，別に伊藤中心という人があるから，その人であろう。(10)〜(13)については，拙稿「内藤中心と源影面とは別人である」（土佐史談110号復刊31号）を参照せられたい。

2　生　　涯

「南路志」や影面の上書（福島氏引用）や影面の著書および賀茂真渕関係・谷垣守関係資料などによって，影面の生涯を述べることにする。

「上書」は，宝暦11年正月元日のものと推定したものである。いくつかに分割して本稿に引用したので，その順序を示すために，引用の終にａｂｃｄｅをつけた。ただし，中略もある。

「南路志」にしるす影面の略歴は次のとおりである。（巻45　人物）

村上影面

姓源。氏村上。初名名道。後影面（カゲトモ）ト革ム。字ハ弁蔵。香美郡大忍村ノ浪人也。性質敏悟。経史ヲ谷垣守ニ学ヒ又和歌ヲ善クス。後賀茂真渕ノ門人ト成リ，古学ヲ唱テ世ニ鳴ル。宝暦年中足軽ノ役ヲ勤メ江戸ノ邸ニ在勤スルコト廿余年。故有テ邸中ヲ逃奔シ，大忍兵士ト革名シ，江戸ニ住シ，後一乗院宮（ヲヅ）ノ徴ニ応シテ官侍シ，名ヲ織部ト改ム。幾若ナラスシテ江戸ニ帰リ，諸侯ノ客トナリ，一家ヲナス。子孫猶存シ，妻子又和歌ヲ善クス。

著　書

古今旧情　古今助辞分類　采藻編　同続　　（東京大学史料編纂所本による）（句読点筆者）

（巻77年譜にもあるが，ほとんど同内容で，中に明かなミスが2カ所あるから略する。いずれもあとに歌1首を付し，年譜には「せうそこ一章」も付してあるが，ここには省略）

出自　影面の父は，土佐国香美郡大忍庄（おほさと）の浪人であった（南路志年譜）。大忍庄は今の香我美町である。大忍庄山北村の郷士村上氏の一族であろうと思われるが，影面がどこで生まれたかは明かでない。（寺石氏は西川村―今は香我美町のうち―の人というが，よりどころが明かでない）

生年　「続采藻編」巻19の影面の「御世をほむる長歌并短歌」に「老らくのなみ。百伝ふ。いそぢにちかく。成にけり」とある。「続采藻編」は宝暦12年（1762）7月の序があるから，この歌はそれ以前のものであろう。いつまでさかのぼりえるかは明かでないが，「続采藻編」を古今集にならって編修するために，古今集の「ふる歌に加へて奉れる長歌」になずらえて作ったものではあるまいか。古今に「つもれるとしをしるせればいつつのむつになりにけり」ともある。そうすると，宝暦12年またはそれに近い時期であろう。ともかく，宝暦12年には，影面は45歳ぐらいであるということになる。かれの経歴を考えてみても，ほぼ妥当な推定だと思う。かりに，宝暦12年に45歳であったとすると，享保3年（1718）の生まれであることになる。便宜上，以下，**享保3年生まれとして年齢を考えてゆくことにする。**

身分(1)　かれは，元文初年ごろ，20歳ぐらいで，**足軽に新規任用**になり，主として江戸の藩邸に勤

務したようである。

上書に「本五百人方足軽にて」「南路志年譜」に「豊敷公御代新規足軽被召出」，真渕書簡に「土左殿の駆使」。「江戸役在勤弐拾余年」（南路志年譜）（これは大まかな数と思う）の後「八ケ年浪人」（上書）を合計概算25年と見れば，上書の宝暦11年から25年前は元文元年である。

垣守との関係　「南路志」に**谷垣守の門人**とあるが，そうであろう。垣守は，儒者であり，神道学者である。元文元年には，藩主の侍読として，はじめて江戸に随行し，以後，宝暦2年没するまで，毎年，藩主にしたがって，高知と江戸をゆき来した。その間，垣守の日記などに，村上弁蔵があらわれるのである。

元文5年（影面23歳ぐらい，垣守43歳）12月，村上随蔭は，江戸の垣守の部屋で，垣守が元文3年に著した「臣子弟のわきまへ・五欲のわきまへ」を写している（山内文庫本奥書）。延享元年（影面27歳）6月15日，垣守は，弁蔵を岡田弥左衛門のところへ遣したところ，岡田盤斎は13日に卒去の由で，「残念之御事也」と日記にしるしている（土佐史談60号中田四朗氏による）。垣守は延享元年9月賀茂真渕に入門し，ついで荷田在満にも入門した。**真淵会読の席に**，垣守とともに**村上弁蔵が連なっている**。後年の真渕書簡（本稿6ペ）に，随影は「志有とて谷丹四郎が頼し故数年書会などへも連らせ」たとある。すなわち，垣守が口添えをしたのである。延享3年垣守が真淵をつれて江戸に行ったときには，弁蔵は高知にいたと見え，垣守のメモに「国へ状遣　弁蔵へ出」（江戸立用事覚）とある。留守宅のことを頼んだものと見える。寛延3年（影面33歳）7月，垣守は，自分が江戸にいたが出席できなかった折および帰国して出席できなかった折の，真渕の古事記会読の内容を随影の筆記から写している。そして，同年10月，垣守は，真渕との対立のために，真渕・在満から退門することを決心し，「村上弁蔵へ岡部羽倉両先生へ退門之事申頼置」き，11月に退門した。そのとき真渕・在満と垣守との間を往来したのも弁蔵である（前記中田氏による）。

このように，垣守と弁蔵との間は非常に親密であった。

真淵・在満との関係　影面は，垣守の紹介で**賀茂真渕に入門した**が，垣守と同じように，**荷田在満にも入門した**。かれが在満の令義解の会読に出席したことが，上書に見えている。

垣守が真渕・在満から退門しても，影面はそのままであったらしい。宝暦元年8月，在満が没したときには，その葬儀に列している。

荷田在満師かにはかにやまひにふして身まかれりけるはふりに侍りて共にふみを見つることのきのふけふの心ちすれはよみ侍りける　影　面

きのふまて共にふみ見し君かけふひとりわけ入よみちかなしも（続采藻編巻16）

真淵のもとで詠んだ歌も多少わかっている。宝暦6年（39歳）2月県居翁家歌会に

あひおもふ　名　道

わが中はいほつつどひの玉なれやかよりかくよりみまほしぞ思ふ

これに対する真渕の評は「しらべいやしげなり」であった（小野古道家集附録）。「賀茂の川水」に収める「ひともときく」は年代不明であるが，りよ女の歌があるから，宝暦6年9月以前であり，「千蔭」の歌があるから宝暦元年以後と推定される。その中に，

名　道

きみを恋ともと聞夜の虫の音もあるかなきかに秋ふりにけり

がある。本居大平の「八十浦の玉」には，「加茂大人人々にとききかせ給へる古今集の竟宴に」という長歌がある。その一部分を抄出する。

玉しきの平の宮の　十あまり一代にましゝ　大君のひしりにまして　かしこかる臣にのらして　そのかみのいにしへ今を　つたはれる千々の言の葉　二十巻にえらひあつめし　歌巻のことの心を　わか大人のよみときさとし　此ふみをともなふとちの　よみいつる鏡になして　姿をも心もつねに　てらしみていにしへふりを　うつしねとをしへしめして　けふはしも事はてぬれは

この竟宴は宝暦4年ごろであったろうか。

宝暦2年12月ごろの真渕書簡（県居書簡続編八）によれば，真渕はそのころ古今集会読を始めており，「賀茂の川水」の「竟宴の事」によれば，2年ばかり続いた由である。延享2年にも古今集会読があつたが，そのときのではあるまい。

宝暦5年（38歳）3月23日，名道は，江戸で，故郷土佐にある母の七十の賀を行なった。そのために，師真渕と真渕周辺の人人に賀の歌をこうた。歌を贈った人人は，真渕をはじめ，越後長岡侯牧野駿河守・旗本の源貞松（横瀬式部）・源昌長・美濃岩村侯夫人葛子・三河苅屋侯夫人薫梅子・長岡侯母路子・橘枝直・橘千蔭・橘常樹・源信益・源正武・小野古道・日下部高豊・田中師邦・富田親行・大橋秀倉・芝崎好成・犬上衛・りよ女・逸子・尼妙量・餘野子ら40人，歌は57首である（南路志巻84）。（・・をつけた人は，「続采藻編」にこの賀の歌のみが収められている者であり，。。をつけた人は「采藻編初編」「続采藻編」の一方または両方に，この賀の歌のほかの歌も収められている者であり，符号のついていない人は，そのいずれにも歌の見えない者である。）

真渕門にあったとき，かれの意見が多少とりあげられたことは「祝詞解」（海名が影面なら）・万葉集真渕書入れ本（後述）において見ることができる。

身分(2)　影面はたいてい江戸勤めであったようであるが，その間，伴部安崇著の「日本紀考」を命によって写し，また，記録物写手頭取を勤めたという。在満の令義解会読に得たものを役立て，藩主の令義解に書入れも命ぜられたという。その後，用がなくなり，御留守居役所の書き事を勤めていたが，「江戸御勘定方役人共，無益の由申断り，時ならず御国へ返し候旨申渡され」たのであった。財政難からの行政整理的なものであったかもしれない。それは（上書から8年前の）宝暦3年（36歳）ごろであった。それでかれは**浪人**になった（以上上書（b部分）による）。

真渕との関係(2)　賀茂真渕の明和6年7月4日蓬莱雅楽あて書簡に次のようにある。

> 綾足といふもの仰の如く今時のはいかい発句てふものをせしものにて侍り。此者従来虚談のみにて交りかたし。されども己が門人に宇万伎といふ人の近所に借宅して，こゝかしこ聞そこなひしを，片哥とやらんをいひなんとて京へのぼりつとか承候。必御交は有まじき事也。……此府にても今一人随影といふもの，是は土左殿の駆使のものなるを，志有とて谷丹四郎が頼し故，数年書会などへも連らせ候て，己が先年未練の説をば多く聞きし者なるを，遂に土左を亡失せし故，町役所へも届有之，もはや故郷へ不得帰候へは，老母再会もかなはず，旁忠孝にかけ候故，此方をも断侍り。然るを，猶こゝかしこに居候て，存の外世間虚談をして，さまさま板彫なども為と聞ゆ。かゝる類多く候て，もし野説又は野子が意など思ふ人も有べく，苦しみ侍り。……右のものども哥はいまだ調はず侍るに，古風などいひ騒を，世には知ものなければ，さても在ことゝ思ふらん也。

これによると，随影は，江戸で脱藩し，故郷へも帰れなくなったので，忠孝に欠けることになるから，**門下から除名**したというのである。これは「南路志」の「邸中ヲ逃奔シ」に当る。ところで，その脱藩の理由は何であろう。おそらく，上書にいう，「御国へ返し候旨申渡され」たためであろう。用済免職になり，帰国を命ぜられたが，それに従わず，江戸市中にかくれたのではなかろうか。次に，**脱藩と除名の時期**はいつであろう。宝暦6年2月には真渕の家の会に出ているから，除名はそれより後である。上書の「八ケ年浪人」からの推定で，免職を宝暦3年ごろとすると，その間に数年ある。免職後1，2年は藩の許可を得て江戸に滞留していたが，ついに藩庁の規制から離れたので，藩庁から町役所へ脱藩の届出があったのであろうか。脱藩と除名との間に数年があるのであろうか。あるいは，上書の「八ケ年」は，8年よりは短いのかもしれない。影面が真渕門除名の後も真渕周辺の人とは交渉があったらしい点から考えると，真渕門除名は脱藩のためばかりでなく，他に真渕の意にそわないことがあったためかもしれない。なお，真渕は「数年書会などへも連らせ」と言っているが，延享から宝暦6年までででも十余年になるから，「数年」はわざと短縮して言ったものであろう。脱藩・除名の時期は，宝暦6年から9年（采藻編）までの間であろうか。

ここに真渕は，この除名者が，自分の先年未熟の説を世間に流布させ，真渕学をきずつけること

を恐れているのであるが，おそらく除名する時，真渕に聞いた説などと言うことを禁じたのであろう。わたくしの見た限りでは，**影面の公表した著作に，真渕の名を見出すことはないのである。**（在満の名はあるが）「采藻編初編」は宝暦9年5月15日の序を有するが，真渕や橘常樹などの歌は見えない。「続采藻編」（宝暦12年7月序）には，影面の母七十の賀の歌を，かの宝暦5年に諸家からもらったもののうちから抜き出して19首も載せているが，真渕・常樹（各2首あった）らからのはない。真渕の歌が影面の選歌基準にあわなかったせいではあるまいと思う。

真渕書入れ本万葉集（金刀比羅宮蔵）巻十を見ると，「為君山田之沢恵具採跡（1839）」の歌の頭に，

土佐人随影云同国童ナト水辺ニテ採テ戯ニ食遊フモノヲエグ芋ト云フ葉ハ山菅ヨリモ猶細シ根クハ井ノ小ナルカ如シ根シユ呂ノ毛モテ包ミタルガ如シ其ノ毛ヲ去レハ内ニ白キ根アリト誠ニ是ナルヘシ

と書いて，「随影」をあとで白墨で塗りつぶしてある。土佐のことのあとに，下総・上総・安房のこともあるので，ここに個人名をあげるのは不釣合なので消したともとれるが，随影除名のことから，除名後に消したのではなかろうかと思われる。

身分(3)　「南路志」によれば，脱藩後，大忍兵士と名乗り，江戸に居住し，後に，**一乗院宮に仕え**，名を村上織部と改めたという。一乗院は奈良興福寺の寺務門跡である。すなわち，かれは**上方に行った**のである。これは，生活のためでもあっただろうが，脱藩者として土佐藩からの追求をまぬかれる方便であったかもしれない。

堂上家ことに冷泉家との関係　上書には「八ケ年浪人」の間に，

和学歌道相励み，律令格式の書悉く其旨を得，令と職原抄には古来の難義且近世古学者と称し候輩惑候事とも分明に小臣講窮仕候。和歌和文は貫之の旨を開き，古今集は貫之の本意にかへり，三鳥一木御箱御伝授の虚説なることを弁へ，皆其実儀を古書に得て相窮，詠歌の道は貫之伝を土左日記の中にて自得仕候。（c）

といっている。ここに言うところは，在満・真渕らに学んだところを深く研究したことのようである。

ところで，かれは職を上方に得るために上京し，京都で堂上家に近づき，**冷泉宗家に入門した。**「紫語菜註」に

正二位藤原宗家卿門人　源影面著

とある。入門の時期は，次に引く上書から見て，宝暦10年以前であり，真渕との関係から見て宝暦6年以後である。

近年，小臣著述の和書且歌書の註釈等九条様並に冷泉家へ御覧に入，九条様の御世子様並に正二位冷泉宗家卿の御息男中将殿には，和学辺御相談仰付られ候。御歌所只今御四人様の中，宗家卿御詠歌宜しく相聞へ候故，小臣詠歌類数十首御覧に入，添削希候処，一首も御難詞無之，此の如き古詠の体を得候事，一向難する処なしとて御許可下され候。（d）

（注）　宗家は下冷泉家で，上冷泉家の為村より10歳年長である。宝暦3年12月正二位，宝暦10年には59歳。その息中将殿は為栄で，宝暦10年3月19日23歳で右近衛権中将公卿補任。この点から，この上書は宝暦9年のではなく，11年1月1日のと判定される。九条様は尚実で，宝暦9年11月左大臣。「御世子」は道前で，宝暦9年11月14歳で内大臣になった。

影面が京都にいたときの，

京にありけるとき八月十五夜九条殿冷泉殿その外諸卿にいさなはれて加茂川にて月を見侍りて
加茂川のこよひの月は雲の上うへ〔ほと〕遠からぬひかりとそみる〔おもふ〕
（「八十浦の玉」による。〔　〕内は「南路志」による）

の歌は人人によく知られていたようである。

すなわち，かれは，宗家に和歌の批を請い，九条・冷泉の御曹司の家庭教師となっていた。これは一乗院宮宮仕の間においてであろう。しかし，上方の居住は長くなかったようである。「南路志」には「幾若ナラスシテ**江戸ニ帰リ**，諸侯ノ客トナリ」とある。あるいは，後にも時折上京したかも

知れないが，主に江戸に居住していたのであろう。宝暦11年冬の日付を有する「采藻編後附」に，「東都に或人下りて侍りける比采藻編の難をとてわか友に託せり」とある。この文面から推定するに，当時影面は江戸にいたのである。

真渕は，綾足と随影とを並べて非難しているが，綾足と影面とは，似たような行動をした人ではなかろうか。綾足が京に上り，花山院右府に「片歌道守」と書いてもらったというのと，影面が京に上り，冷泉宗家の門人になったのと似ているように思われる。

社会的地位　影面の上書には，上に引用したのにひきつづき，次のように述べている。

江戸表にて和学和歌等の御相談仰蒙り候は，只今の増上寺大僧正の御吹挙にて，松平伊予守様（岡山池田侯）其外の手寄にて，松平出雲守様（富山侯），先づ奥平大膳大夫様の従室心源院様，松平佐渡守様（亀山侯嫡子），小笠原佐渡守様の御女弟様方，松平能登守様，同御奥方，遠藤備前守様（近江三上侯），六角伊予守様（高家），松平下野守殿（亀山侯嫡子）御息女方，米倉采女殿，長谷川利十郎殿，同御舎弟，御目見以下も少々有之候。（細注は筆者）（e）　（「先づ」は「先の」の誤りか）

これは「南路志」にいう「諸侯ノ客トナリ」である。これらのうち，影面との関係が証明できない人もあるが，増上寺大僧正・奥平大膳大夫従室心源院（豊前中津侯母）・松平能登守（美濃岩村侯）奥方・米倉采女（源昌長）・長谷川兄弟（藤原勝富・同勝統）や，小笠原佐渡守（奥州棚倉侯）の女弟の侍女たちは「続采藻編」の作者である。また，「采藻編」初編・続編の作者には，豊後岡侯・津国尼崎侯や館林・岡・大洲・岩村・刈屋・越前・備前・棚倉諸侯の家中あるいは侍女が多数ある。（これらはたいてい真渕関係資料にあらわれる人や藩であるから，影面がこれらの人に近づきになったのは，真渕門にあったことによるのであろう。）だから，影面の上書は大言壮語してあったようではあるが，その自己の経歴は，誇張はあっても，無根のことではないらしい。

かように**公卿や諸侯旗本の家に出入し，和学和歌の御用を勤めた**ことは，だいたいにおいて事実であったと認められるのである。

上書　江戸で，将軍吉宗によって始められた目安箱は，土佐藩でも宝暦9年8月19日に至って，「訴訟箱」として設けられた。そこで，影面は10月15日づけ上書をそれに投じ，藩政改革の抱負を述べた。そして，さらに11年1月の上書となる（前章(ii)参照）。それには，

御政事御講究御用として，小臣召出さるへく候へは，席は御仕置，御側御用人の列，祿は千石に仰付らるべく候。若又御政事御預け成さる思召にて召出さるべく候へは，御国政に預る席にては第一座，祿は三千石に仰付らるべく，朝堂の御礼には，御執立の故を以て，御家老の末席に仰付らるへく事。格祿右両様よりも賤き時は，不臣佞者の為にあなどられ，御国民服せず，無用の沙汰に成り申候。（a）

と述べている。なるほどもっともなことではあるが，当時として到底実現しそうもないことである。上に引きつづいて，自分が登庸されれば，大概十年内外に国政は改まるだろう，その上は，暇をたまわり，京江戸の中に住居し，「和学和歌和文の体を古にかへし申度志に御座候事」といっている。既に引いた上書の文面は，これにつづいて，かれが和学和歌和文に学識・能力のあることを言ったものである。

これらの上書は，影面が土佐に帰るだれかに託して，訴訟箱に投じてもらったものであろう。かれは脱藩者であるから，帰国はできなかったと思う。この当時まだ脱藩していなかったと仮定しても見たが，すでに脱藩していると見たほうが，よりよく説明がつくようである。「村上織部」の署名（3ページ(ii)参照），公卿諸侯の門への出入のことなどそれである。

采藻編の刊行など　宝暦9年5月15日かれは「采藻編　初編」の序を書いた。おそらくそれから間もなく刊行されたことであろう。これはおそらく真渕門から除名されてから後であろう。宝暦11年冬には，「采藻編後附」を書き，12年7月1日には，「続采藻編」に序した。また，11年5月1日には「古今集旧情」の序注を書きあげている。11年1月の上書には，「小臣著述の和書且歌書の注釈」を九条様・冷泉家に御覧に入れたとある（その時は明かでない）。ともかく，宝暦9年ごろから

12年ごろにかけて，盛に著述をしていたらしく思われる。

晩年　宝暦12年，「続采藻編」に序してから，明和5年まで6年の間の影面の消息は不明である。明和6年10月「古今集和歌助辞分類」が発行された。10月30日には旧師真渕が没した。真渕はその3カ月前，蓬莱雅楽あて書簡に随影を非難したのであった。明和6年影面は52歳ぐらいであった。

あとに引く「松虫音」は，影面が匿名で書いたような感じもする（信夫女という名に注意）のであるが，この書を信ずれば，安永5年以前に，影面は消息不明になっている。安永5年は明和6年から7年後である。

家庭　影面は江戸に出て久しく帰国しなかった。故郷には年老いた母がいた。宝暦5年，その母の七十の賀をはるかに江戸で行なった。この母は，「続采藻編」のできる前になくなった。「続采藻編」に

にし国にて母の身まかれりけるにあつまに侍ておもひにこもりけるころ月の入を見て　影　面

月の入かたになかめしたらちねをけふよりいつちむきてしのはん

とある。「続采藻編」には，また，次の歌がある。

みなもとのかけともかめの身まかりけるにいはけなき子さへありけるをとふらひ聞えけるふみのかたつかたにかきつけゝる　蒼生子

なきとこをしのひてなけく君よりもなきてこふらんこゝろをそ思ふ

返し　影　面

すてられし身はさることにさましてもいはけなき子を見るか悲しさ

妻が子をおいてなくなったのである。荷田蒼生子（在満の妹）が弔問の歌を贈っている。影面の子が袴着をしたとき，中津侯の御母からいただいたという歌も「続采藻編」（雑下）に載っている。

「南路志」編修当時，すなわち文化年代に，影面の子孫は生存していた（江戸にであろう）。

人物　頭脳がよく，学問にも和歌にも相当すぐれていたが，客気にはやるところがあったかと想像せられる。それで，古典会読の席などでも，よい意見も出したと思われるが，客気にはやるところから，真渕の信用を得なかったかと思われる。

友人・門人　「采藻編」ことにその初編の作者は，影面の友人や門人であろう。

「采藻編」の作者を見ると，真渕門人が何人も見える。藤原冬樹（大原四郎兵衛）・源信益（黒岩助左衛門）・大宅公庸（円山兵衛門）・古谷信静（茂左衛門）・高橋秀倉・小野古道・橘三園・菅原信幸・林諸鳥・安倍正房などである。影面が真渕門人であったから，同門の知人であろう。宝暦11年8月には，高橋秀倉の3年忌に歌を贈っている（続采藻編）。

「古今集和歌助辞分類」の序（日下部背面）に，「源影面師」とある。背面（ソトモ）は門人ということになる。背面の号は影面に対したものである。あるいは影面が門人めかしてこれを書いたともとれないことはない。実在の人物だとすれば，真渕門下にあった日下部高豊などの子でもあろうか。

「松虫音」（藤原信夫女著安永5年写という）には，次の記事がある由である。

此頃東の都に村上影面といへる人あり。元は土佐の国の人なりとかや。東都に住て，名にしある賀茂真渕につきて国のふみの事など問けり。其後平の都に上り，冷泉中納言殿家に見へ奉り，歌の事学びしより後は，京都に名くはしく，其門により来る人数しられずなん有りける。夫が中に笹川道張と云人は歌の道懇ろなりしにや，彼影面が撰べる采藻編に歌数あまた入り。今は其影面いつちいにけんしらず。書るものなどは桜木に残りてむなしき名のみ。さて此人も歌などよむとしも聞へず。嵐の後の林とやいはむ。（国学者伝記集成続編，笹川道張の条。道張は越前の人。笹川林大夫（享保6～天明3）といい，采藻編初編に3首，続編に18首入集している。）

影面の筆跡　影面の筆跡かと思われるものが2つある。1は既述の，元文5年に随蔭の写した「臣子弟のわきまへ・五欲のわきまへ」（高知県立図書館山内文庫）であり，1は，国立国会図書館亀田文庫の「天仁棄之大事」の写本である。しかし，いずれも転写本でないという証明はできない。

土佐における影面　土佐において影面が活動した跡は，上書以外にはない。長く江戸にいたし，後には脱藩したためであろう。影面は谷垣守に親しかったのであるが，垣守の子真潮との交渉の跡はない。影面が脱藩者であるから，藩の役人である真潮は交際しようとしなかったかもしれない。しかし，影面は土佐出身の相当の名士として，土佐の文学者には知られていたらしい。文化年代の「南路志」には，影面の伝を載せ，和歌集には影面の歌88首を収めている。これは真潮の100首と並んで，他よりぐっと多いのである。88首のうち，采藻編にあるもの80首で，他の8首の出所は不明である（うち5首と他の6首が「敏屋雑記」にあるが出所の記載はない）。また，吉田孝継の「採玉集」（文久3年横山直方序）にも，影面の歌は16首採られている。これは真潮・今村楽の100首以上にくらべるとはるかに少ないが，ともかく相当数が採られている。この16首は，采藻編にあるもの12首を含めてすべて「南路志」和歌集にあるものであるから，「南路志」によるのかと思われるが，語句はかならずしも一致しない。

3　著　　作

賀茂真渕の書簡に，随影を非難したところに「存の外世間虚談をして，さまさま板彫なども為と聞ゆ」とある。影面が相当多数の書を出版していることが真渕の耳に入っていたようである。しかし，今日われわれの見る刊行書は数部にすぎない。

まず，次の書は，版本あるいは写本を見ることができる。

(1)	采藻編　初編	宝暦9年5月15日序	1冊	刊本
	後附	〃　11年冬成る	1冊	刊本
	続編（続采藻編）	〃　12年7月1日序	2冊	刊本
	作者（続采藻編作者　初編共）	〃　12年	1冊	刊本
(2)	古今和歌集もとのこゝろ（序注）	宝暦11年5月1日	1冊	写本
(3)	古今集和歌助辞分類	明和6年10月	2冊	刊本
(4)	紫語素注	年代不明	1冊	写本

これらについては章を改めて解説する。

次に，「古今集和歌助辞分類」の1本（明和六己丑初冬　植村藤三郎・西村源六・近江屋伝右衛門の刊記を有する苅谷図書館蔵本）の終りに，次のようにある。

日本言葉類聚釈（やまとことば）	万葉集鶴気（やまのしづく）全部注	古今集旧情（もとのこゝろ）全部注	同附録
同（古今集）序余論	同歌体分類	同句制分類	同助辞分類
伊勢物語賛注	源氏物語賛注	催馬楽賛注	土佐日記助語辞解全部注
百人一首歌意（うたのこゝろ）	采藻編改選	翫桜花日本（やまと）辞	翫仲秋月日本辞
詠奈良故京長哥短哥	駅路（はゆまぢの）日記 初度一部 二度一部	右　雪斎先生著述	
はるの友　同遊同詠	かな題哥合　同遊同詠	右　近刻	

「右近刻」とあるからには，「右雪斎先生著述」は既刊のもののように思われるが，果して全部刊行されたものであろうか。

次に，影面の著書の中に見える著書として，次のものがある。これには，解説を加えておく。

(ア)　百人一首うたのこゝろ　　「采藻編後附」「紫語素注」凡例に見える。

おのれ百人一首の哥の意に既これ（かなづかひ）をことわりて（采藻編後附）

其（行阿仮字文字遣）偽書なる証は百人一首うたのこゝろに既挙て論しぬ。（紫語素注）

上記の「百人一首歌意」である。「采藻編後附」に出ているから，宝暦11年以前にできていたはずである。

(イ) 類聚釈　「紫語素注」に見える。

和語の意も亦漢字の義の如く。上しもの語の連続によりて意さまさま流転せり。解て益ある物多しといへとも。今。人の耳なれて聞え安きは類聚釈にゆづりてこゝにわつらはしく注せず。（凡例）

義類繁多なる物は大むねを解て。其下に類聚釈にゆつれるよしをしるせり。（凡例）

女御は級高く。更衣は其次の級也。委くは類聚釈人論（倫）の部に出しぬ。

これでみると，「類聚釈」は，分類体国語辞典のようである。上記の「日本言葉類聚釈」はこれであろう。完成していたか疑わしい。

(ウ) 古今和歌集のもとのこゝろ　「古今集和歌助辞分類」の日下部背面の序に見える。

これらのほかに，武藤家の「敏屋(みのや)蔵書目録表」に，

碧海筆記　源名道

とある。

「南路志」人物伝にあげてある「古今旧情」「古今助辞分類」「采藻編」がやはり影面の代表的著述であろう。

4　采　藻　編

「采藻編」は当時の歌人の歌を集めたものである。

1　采藻編　初編　序3葉　本文20葉

表紙も内題も「采藻編」とあるが，末尾には「采藻編初編終」とある。序のおわりに，

宝暦九年五月十五日　源影面しるす

とある。

序は，

古今和歌集の如きは。をりをわかち。しなをことにし。たくひをとること。にしきを織れるよりもあさやかに。まことあることは。かぐ山のいちさかきみの。みあるよりもふさやかに。こゝろあをうみのふかきよりもふかく。うるはしきことは。春の花のはなやかなるよりもはなやかに。しらへ。秋の夜のなかきよりもなかし。かくてそ後撰和歌集よりこのかた。これをのりとしたまふける。

と，古今集を規範とする態度を述べ，

たゝ歌のみやひやかなると。みやひかならさる。いにしへに似たると。いにしへに似さるは。そのまなふとまなはさる。好むとこのまさるにあるのみ。されはたれそのしなの人の歌のかきりは。うたにありて。これよりあまりかうたは。歌にあらすといふことわりやはあらん。こゝにあそふとちかにこり江のうきくさなすことの葉をも。こゝろみにかいつらねてんやといへれは。したかひて。いさゝかとれり。

と，歌の雅であるか否かと，古風に似るか否かは，歌の学習と歌への執心とによるだけで，その人の階級の高下にはよらないのであると言い，自分のもとで歌を作っている人たちが，その作品を集めてくれというから，選んだのであると言っている。この，階級の高下によらないとの言は，「国歌八論」の官家論にいうところと精神を同じくする。さらに，

はた今よりこれかのちにかきつゝけんことは。すかたいよいよ花やかに。高き山の高きよりも賜はり。こゝろますますふかく。ひろき海のひろきにももとめまくするになん。

とある。これを初編として，次次に続編を出し，もっと広く人人々から集め，身分の高い人たちからもその作を得たいと考えていたのである。

この初編は，影面の歌を巻頭に，55名の作品172首を収める。その内わけは，

影面　22，俊瀬子　4，44名　各3，5名　各2，4名　各1

で，1人3首を基準にしている。おそらくは，それらの人たちが，出版費用を出して，この集が刊行せられたのであろう。

歌の部類とその歌数は次のようである。

春37　夏27　秋28　冬26　恋29　雑25　計172

各部類ほぼ平均している。夏冬の歌が普通一般の歌集に比して多いのが一特色であろう。

2　采藻編後附　9葉。終りに，

宝暦十一年冬　　源　影　面

とある。

初編が出たとき，下間惟哲が

藻塩草かきあつめたる和歌の浦の浪もむかしに立帰りなん

という歌を贈ったのに対し，影面は，

若の浦の浪のぬれきぬかつくともふりにしすかたかくれやはする（続采藻編雑下）

の歌を返している。人からの非難は予想していたのである。果して，「東都に或人下りて侍ける比，采藻編の難をとて，わか友に託」することがあった。「或人」は京の旧派の歌人と思われる。その難者の言の要点をしるし，「弁」を述べたものが，この「後附」で，難は15首についてあったようであるが，うち13首について弁をしている。かなづかい・おくりがな・てにをはに関すること，詩の意を歌によむとき，語句にかかわらぬことや，歌体のことや，古歌によまなかったものをよんでもよいことや用語の典拠など，万葉を引き，古歌を引いて，論じている。そして，そういう難は，「辞（ことば）を修むる学び」をいとうから起るのだと，きめつけている。

この「後附」は，実際に難者があったのに対して書いたのではなく，影面みずから難を設定して，それに答える形で意見を述べたものだととれないこともない。

3　続采藻編作者　初編共　6葉。終りに，

宝暦十二年　　采藻編集者村上織部

源影面

とある。作者の藩籍や実名をしるしているが，それが空白になっている者もある。

4　続采藻編　上下2冊。　上は序2葉，〔凡例〕3葉，本文55葉（巻1～10）。下は50葉（巻11～20）。序の末尾に次のようにある。

宝暦十二年七月朔日源影面しるす

序に，昔は歌に十七，八種あったが，今は三，四になっている，この編には，かの十余のしなじなを学んだのも少なくない，江戸開幕以来平和に栄える世であるから，古のあとにつぐ歌もおのずから生まれるのだと言っている。序のあとに，長歌・旋頭歌・俳諧歌の説明（本書に雑体を収めたためであろう）と作者のしるし方とを書いている。

作者は，予定どおり，範囲が広くなり，146名（内名をあらわさない者2）（内初編の作者37名）で，歌は1097首である。作者の中には，諸侯旗本9名と諸侯の母・内室4名を含んでいる。この階層の人の歌は初編にはなかったのである。ただ，公家は含まれていないようである。巻1巻頭，巻20巻尾には，いずれも影面の歌をおいている。歌数の多い作者は，

*源影面72　源茂勝67　豊前中津侯御母38　藤原以興34　豊後岡侯32　鎮子32　富子23　*重常22　尼崎侯21　哲子21　留衛子19　美子19　*源道張18　*源盛庸18　源満矩18　牧子（満矩妻）18　*橘常貞17　*林諸鳥17　*大枝秋成16　平佳胤15　格子15　万世子15　（10首～14首は男13女5，うち*7）

である。*のついているのは，初編の作者である（影面を除くと6名）。影面についで歌数の多い源茂勝は，紀州の北村半平である。この21名の中に女性が9名いるのも注目せられる。

続編の編成は，古今集にならって，20巻とし，古今集の刊本のように上下2冊にしている。部立も古今集にならい，巻20だけは大歌所御歌に相当するものがないので，千載（巻20）・新古今（巻19）にならって，「神祇」とした。総歌数も古今集にならっている。ただ，部分的には，夏冬

賀の歌などが多くなっている。

	春	夏	秋	冬	賀	別	旅	物	恋	哀	雑	雑体	大歌神祇	計
古　今	134	34	145	29	22	41	16	47	360	34	138	68	32	1100
続采藻	131	85	135	76	62	28	35	26	319	38	114	26	22	1097

（古今集は古典文学大系による）

（下）予定

5．古今集旧情
6．古今集和歌助辞分類
7．紫語衆註
8．和歌および歌論
9．文章研究
10．語学的研究

（昭和43年 9 月30日受理）